

大学ランキングをめぐる世界狂騒曲〈上〉

中国が創出し英国が後追いついた、対照的な二つのランキング

高部英明 ドイツ・ヘルムホルツ研究機構上席研究員、大阪大学名誉教授

プーチン政権も「世界トップ100に10大学入れる」

2015年10月29日

英国の教育専門誌「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE）」が、今年の世界大学ランキングを発表した。日本の大学が軒並みランクを下げたと複数の[新聞が報じた](#)。今や10月の恒例行事になりつつあるようで、国内の有名校の執行部はランクに一喜一憂だ。

このような狂奔は日本だけかと思ったら、昨年6月に訪ねたロシアでも「世界トップ100に10大学を入れる」と、プーチン政権が打ち出していた。そして、モスクワ大学、ノボシビルスク大学(NSU)など10校への財政支援事業を昨年から始めていた。年間10億ルーブル（約30億円）を各大学に3年間支援する。

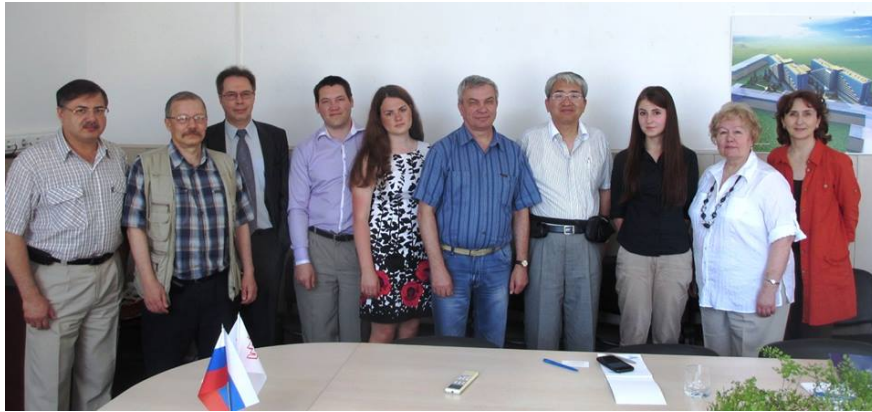


写真1：2014年6月、シベリアの玄関にあるノボシビルスク大学を訪問した。大学間交流の議論をしたいと事前に伝えていたら、学長（筆者横、右から5番目、青いシャツ）以下、主立った教授や国際部の事務方など大勢に大歓迎された。

訪ねたNSUはその資金で建物増築中であった。私は当時在職していた大阪大学を代表して大学間交流の交渉に出かけたのだが、このような背景もあり、学長以下、多数の教職員に熱狂的に歓迎された〔写真1〕。「阪大と交流できれば国際化でランクが上がる」と喜んでた。

15年来の研究仲間の親友・張傑(Zhang, Jie、写真2)が学長になった上海交通大学の場合も驚く。彼は実績を積み、5年ほど前、「教育・研究の質向上のために、現在の教員の1/3を先進国で活躍している研究者に替わってもらう」と宣言。講義も英語でもらう。

その後、年間100人程度の研究者を、米国で活躍している中華系を中心に、ヘッドハントしてきている。学長曰く、中国政府だけでなく、上海市も大学国際化・質向上に重点投資をしてくれるそうだ。

我が国では、数年前から文科省も意識するようになり、通称「グローバル30（[G30](#)）」や「スーパーグローバル大学創成支援（[SGU](#)）」と呼ばれる世界大学ランキング向上の補助資金を著名



写真2：上海交通大学学長で親友の張傑(前列右)と筆者(前列左)。後ろは研究仲間の盛政明(Sheng, Zheng-ming)教授やその家族たち。

大学に注入してきている。筆者もG30では、英語で全て教育する大学院コース設立、留学生勧誘・受け入れに関わってきた。

その後の事業として平成26年度にSGUが公募され、13の大学が「タイプA：トップ型（世界大学ランキングトップ100を目指す力のある、世界レベルの教育研究を行うトップ大学を対象とする）」として採択された。平均年間4.2億円の予算が10年間交付される。

世界大学ランキングの元祖は上海交通大学

ところで、世界大学ランキングを始めたのは中国の上海交通大学ということをご存じだろうか。私は上記の国際化推進に関連してランキングの調査をした。親友の学長にお願いし、2013年4月、世界大学学術ランキング研究センターを訪問し、当初から本事業に携わっていた副所長と面談した。

彼は、何故、上海交通大学がランキングを公開するようになったか、その歴史から紐解いてくれた。

1998年5月、当時の国家主席・江沢民が北京大学創立100周年の記念式典で講演し「国家目標として、中国の大学を世界レベルの大学に躍進させる」と宣言した。ところが、当時の中国では「世界レベルの大学」とはどのような大学なのか、だれも知らない。

そこで、江沢民は母校の上海交通大学にその調査を命じた。大学では学長が、当時、教育学部に所属していた副所長たちに「どのようにすれば中国の大学が世界レベルに向上するのか、調査してほしい」と依頼し、さらに、そのデータを基に現実的な戦略を提案するよう求めた。

まず彼らは、米国の大学を調査することにした。評価の高い大学と低い大学、中程度の大学のデータを集め、何が原因で評価が分かれるかを詳しく調べた。

調査範囲を広げ世界の200の研究型大学を対象とした。そこから評価基準の大まかな方針を決めた。そのようなデータの間接報告を政府に提出するや、教育省の役人が大変興味を示した。

そこで、彼らは自分たちが研究してきた大学のランキングの評価の仕方に自信を持つようになった。その後、2年間のベンチマーク期間をおいて2003年に世界で初めて「世界大学学術ランキング」として発表した。そのような試みは欧米でもなかったため、世界で大きな反響を呼んだ。最新版はこの[URL](#) に掲載されている。評価の方法も詳しく書いている。

後追いの英社は異なる評価方法をとる

一方、本稿の冒頭でふれたランキングは、The Times社系列の「THE世界大学ランキング（略称：THE）」である（最新版の[URL](#)：当初の名称は「QSランク」）。これは上海交通大学が大学学術ランキングを公開した翌年の2004年から公開が始まった。

その初版の前書きには「このような世界的な大学の評価は本来、アングロ・サクソンが担うべき役割であり、中国に先を越されたことは痛恨の極みである」とのような表現があったそうだ。

世界には現在、これら以外のランキングも公開されているが、この上海交通大学のランキングとTHEのランキングは評価が対照的で双璧をなすと私は考えている。

評価方法は毎年少しずつ変化しているが、おおざっぱに言えば、上海交通大学はデータを根拠に順位をつけている。教員の質ではノーベル賞、フィールズ賞学者の輩出が大きな点となる。また、研究成果もNatureとScience誌への掲載数

の比重が大きい(Natureは毎年、1年間の掲載論文数の大学ランキングを公開している)。上海は数値データに基づく各大学教員の研究能力の総合的な評価でランキングをしている。日本は東大21位で100番内に4校が入る。しかし、ドイツは3校である。日本は今のところ研究力では優れている方だ。

ところが、THEの方は教育、研究、被引用が30%ずつ（残りは国際性7.5%と産学連携2.5%）で、教育の中の15%、研究の中の18%、計33%分は「reputation」、いわゆる第三者からの評判である。世界中の著名な研究者にメールや手紙を出し、知る限りの大学の評価をしていただく。この点はどうしても欧米の研究者偏重になる。私に評価の依頼が来たこともある。私は国際共同研究を通じて交流のある優秀な院生や教員がいる大学を上位に置いた。

7.5%を配分している国際性で評価するのは、留学生の割合、外国籍教員の割合、国共同研究の多さである。しかし、国際性はこれらの数値だけに関係するのではない。ほとんどの大学教員が国際共同研究を主に欧米と行っていれば、当然、大学への評判も良くなるし、被引用数も増える。やはり、大学教員個々人の世界的な知名度という数値で表せないデータがTHEの場合には比重が大変大きい。どちらかという、THEは将来グローバルに活躍したい学生にとって魅力的な大学のランクと言えよう。

それでも、対抗意識かフランスでは上海交通大学のランキングが重視されているらしく、そのランキングで大学への政府からの予算が上下すること。そこで、知人の学長から張傑に「私の大学のランキングを何とか上げていただけないか」と相談の電話があるそうだ。しかし、「学長といえども手を出すことは一切できない」と断る。フランスはランクを上げるために、大学の統合を政府が推進している。スケール・メリットで論文数などを増やす。また、大学運営の合理化も狙ってのことだそうだ。 (続く) 論

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.